浮気な恋

月乃宮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
浮気な恋

【Ｎコード】
Ｎ９３０９Ｓ

【作者名】
月乃宮

【あらすじ】
愛を信じられなくなった園子（そのこ）は、美形で謎めいた夜の男イツキと関係を持つ。二人の思いは時にすれちがい、時に重なりあう……やがて芽生える新しい気持ちとは……切ない気持ちがゆらめく、大人のラブストーリーです。

1. 浮気な恋

深夜0時を回ると、どきどきする。だってあの人が来るかもしれないから。

あの人はとてもモテる。夜の仕事を生業（なりわい）にしていて、その世界じゃ顔も広い。そして『恋人』もたくさんいる。

水商売の男と付き合うなんて、あたしを知る人達は考えられない、と言う。だまされている、と親切にも忠告してくれる人もいる。そういう人は、きまって彼の外見を見れば分かると言う。

スラリとした体躯と身のこなし、美しく整った顔立ち、そして彼の表情……艶めいた色が滲み出ており、それは指先から足のつま先までに至る。絶対堅気じゃないと言う。あたしもそう思っているのだけれど。

二十五年間ごく真面目に生きてきて、つまりは面白くないやり方ばかり選択してきたように思う。進路を選ぶ時だって、就職先を決める時だって、いつも無難な道をとってきた。自分の体に薄く貼られた、膜のようなものを破ったことは無かった。

けど、それも彼に会うまでは。

彼と付き合うようになり、あたしは変わっただろうか。彼と付き合うという行為自体、皆は『変わった』という。

きっと失恋のせいね、まだ引きずっているのよ、と言われた。それも一理、あると思う。

あたしの元恋人は、大学時代のサークルで知り合った人だった。出会いも平凡、飲み会で隣に座っただけ。

きっかけは何であれ、あたしは彼の手を取ったことは間違いじゃないと思った。特別かっこいい人ではなかったけれど、誠実そうな人だった。

その頃のあたしは、浮気って金持ちかカッコイイ男のする行為だと信じてた。こう言ったら失礼だけど、元彼は別に金持ちでもイケメンでもなかった。どちらかというと貧乏で、いつもお金に窮していた人だ。

そんな彼の狭いアパートで寄り添うのが、あの頃のあたしにとってやすらぐ時間だった。そんな時を二人で過ごしながら、将来の話をしたのだって一度や二度ではない。結婚なんて、いつかくるべき時にくるものだ、と理解していた。

そんな彼が浮気をした。

二股かけられるなんて、しかも一年以上も気が付かなかったなんて、あたしも大概ぼんやりだなぁと思った。気づいた時は彼に対する怒り以上に、自分のうかつさに呆れた。もうちょっと注意すれば、もう少し早くに気づいたかも知れないのに。

きっと安心しきっていたのだろう……浮気なんてされないだろうって。

あたしが彼と別れると、周りにいる女の子達――友人から単なる知り合い、果てはテレビの中の人を含め、こう言ったものだ……『どんな男だって浮気するものよ』

じゃあ、とあたしは考える。どうせ浮気されるのならば、とびきり浮気しそうな男と付き合えばいい。最初から分かっていたほうが、

いっそあきらめがつくと言うものだ。

そして浮気性の男なら、とびきりイケメンがいい。そうすれば彼の顔を見るたびに思い出せる……『ああ、彼は浮気する男だ』と。あたしはただ、あたしなりの愛情だけかければいい。

「園子（そのこ）、まだ起きてた？」

深夜０時半過ぎ、あたしはイツキと向き合っていた。

斜め分けで綺麗に流したブラウンの前髪からのぞく視線が色っぽくて、向けられるだけで心臓がきゅっとつかまれるかのよう。軽く落とされたキスからは、お酒の香りがした。

「バーテンでも飲むの？」

「うちの店では、付き合いで客と飲むこともあるからね」

「ふーん、ホストみたい」

「遠からず、近からず、ってとこかな……気になる？」

あたしは彼のガラス球のように青い瞳をまっすぐ見上げた。

「別に」

「だと思った」

クスクス笑いながら彼はあたしをベッドに押し倒す。彼は触れるのが、とても上手い。

◇　◇　◇

明け方、コーヒーを片手にイツキがあたしを揺り起こす。

「まだ早いのに……」
「まだ出社まで時間あるだろ？」
「分かってるなら、もう少し寝かせて……玄関カギ閉めるの忘れないでね」
「うん、それは分かってるけど」
「もしかして、合鍵忘れたの？」

あたしがしぶしぶ身を起こすと、イツキはコーヒーの香りがする唇を寄せる。思わず吸い寄せらせそうになり、あたしはあわてて顔をそむけた。

「朝は、だめだよ。会社もあるし」
「そんなつもりじゃないって」
「じゃあ、どんなつもりよ」
「ただの、愛情表現」

振り返ってイツキの顔を見ると、いつもの優美な笑みを浮かべていた。食えない顔だ、コイツ。

「……は、いらないか。やっぱり」

その言葉に、あたしは目を伏せる。形の良い唇の残像……これが、どのくらい多くの女の人に甘い言葉をかけたのか。
そして、どのくらい残酷な言葉で傷つけたのか。

あたしは傷つけられない。だって、浮気承知だもの。
薄い、その場限りの愛情しか信じてないもの。

ずっと続く愛情なんて、もう夢にも見ないもの。

2. パルファム

髪から香るパルファム。
大人びてて甘え上手で、でもちょっと辛口……そんな女の人が閉じた瞼(まぶた)に浮かんだ。

「コラ、うわのそら」
「あ、ゴメン」

あたしは思わず口の端に笑みを浮かべた。分からないように、こっそりとしたはずなのに。

「……なんで笑うの？」

薄目を開けると、少し不機嫌そうに目を細めたイツキの顔が見えた。綺麗に整えられた弓形の眉は少し細めで、香りと相まって、あたしは妙に納得する。
夜に咲く花から花へと舞う、蝶のような男。

「キス、しないの？」
「気が失せた」

薄いブラウンの前髪をかき上げながら、ドレススーツのトラウザーからブラック・ルシアンの黒い小箱を取り出す。
手にしたひとつを流れるような動作で口にくわえると、部屋の隅に置かれたラブソファーの肘掛に浅く座った。

「美味しいの、それ」
「試す？」

差し出された金色に光るフィルターに、あたしは首を振った。あたしはタバコを吸ったことがないし、吸うつもりもないから。
ただイツキの吸っている姿が嫌いじゃないだけ。
元彼は嫌煙家だった。少しでも服に臭いがつくことを嫌った。
タバコの臭いが染み付いていく部屋に、あたしは安らぎを覚えていた。イツキが出入りするようになり、ここは少しずつ変わっていく。
昔のあたしが知らない部屋に染まっていく。
「今度店へおいで。これと同じ名前のカクテル作ってあげる」
「美味しいの、それ」
「強いけどね」
組んだ足に置かれた手から立ち上る紫煙が、宙に細い亀裂を刻み込む。
その夜、イツキは泊まらずに帰っていった。

◇　◇　◇

次の金曜日の夜。
あたしは残業を終えて会社を出ると、いつもの帰りとは逆方向の電車に乗った。
イツキの働く店の近くまで来ると、突然誰かに腕をつかまれた。
強引に引っ張られて少しよろける。
「あんた、イツキと付き合ってるの？」

目の前に立つ女性は綺麗で華やかで、あたしみたいな普通の会社員とは比べ物にならないくらい妙にあか抜けていた。
イツキの『恋人』の一人だろう……前にも同じような事があったから分かる。

「イツキはあんたと真面目に付き合ってなんか無いのよ」
「……知ってます」
「あたしとも寝たしね。今でも週一、二回は会ってるの。知ってた？」

強いパルファムの香り……キャンディーのように甘い。この間とはまた違う、知らないもの。

「知ってます。他にもたくさんいるって」
「ふうん、知ってんだ。でも、あんたみたいなのと一緒にされんのもムカツク」
「あたしは別に、ムカツキませんけど」

バシッ、と耳元で音がした。
打たれた頬がジンジンして、それからじわりと痛みが走る。手で触れてみると、血がにじんでいた……きっと指輪かなにかで引っかかれたに違いない。

「サイテー、ムカツク。クソ女」

そう言って、あたしを叩いた女性は憤慨した様子で立ち去っていった。人通りが決して少なくないこの場所で、あたしたちのやり取りに気を止める人は誰もいない。

◇　◇　◇

店に入って奥の席に着くと、カウンターにいたイツキがやってきた。

「今日は降ろしてるんだ、珍しいね」

さりげない仕草であたしの髪をつまむ長い指。

あたしは先ほど店の前で外したばかりのシュシュをにぎりしめたままだったことに気づき、あわててそれをバッグに突っ込んだ。それから指先で髪を、顔の横になでつける。

「この前話してたカクテル飲んでみたい」

「ブラック・ルシアン？」

あたしは黙ってうなずく。

早く、カウンターへ戻って欲しい。ここの場所、暗がりだからいいけれど……ちょうど叩かれた側にイツキが立ってるから、気が気じゃない。

「なんかご機嫌斜めだね。顔もろくすっぽ見せてくれないし」

「カウンター、空けてていいの？」

「はいはい……ちょっと待ってて」

イツキが立ち去ると、あたしはほっとしたように髪にやる手を下ろした。

あの子の顔を思い出す。細い眉がぎゅっと寄っててスゴク怒ってた。

だけど今にも泣き出しそうにも見えた。

イツキを通して、あたしと繋がっているあの子。なんだか抱きしめてあげたい衝動に駆られる。
きっと嫌がるだろうけど。

「……どうした、コレ」

はっとしてあたしは顔を上げた。
いつの間にか戻ってきたイツキがあたしの髪をかき上げて、にらむように見つめている。ワンテンポ遅れながら、あたしはその手を振り払った。

「血が出てる」
「カウンター、戻らなくていいの？」
「シキに頼んできた」

アゴで示めされ先には、カウンターに立つ長身で黒髪の男性がいた。手際良く、かつ洗練された動きでカクテルを作っている姿にしばし見とれる。

「上手だね、あの人……シキさん？」
「当たり前。俺よりキャリア長いし」

目の前に置かれた茶色い液体が満たされたグラス。そっと手に取り、鼻先へと近づけた。
強くて甘い……クラクラと香りだけで酔いそうだ。

皆そうだ、きっと。あたしの移り香を、どこかで嗅いでいる人がいる。
そんな香りさえ、イツキならば自らを魅力的にみせる小道具にしてしまうはずだ。

様々な香りに包まれて、あたしは落ち着く……ああ、あたし一人じゃないんだって。こんな風にカクテルを飲んでいるのも、あんな風にイツキに触れられているのも。

ひとりぼっちじゃないんだ。

◇　◇　◇

その夜、深夜1時過ぎ。イツキがあたしの部屋を訪れた。

軽く抱き寄せられて気づいた香りは、キャンディー・パルファム。よかった、あの子もひとりじゃなかったんだ。

叩かれた頬に唇が寄せられ、あたしは従順に顔を上げた。小さな傷を執拗(しつよう)に舌でなぞられると、あたしはうっとりと目を閉じる。

「消毒ぐらいしておけよ」

「今してる」

「……馬鹿だな」

そのまま腕に閉じ込められた。イツキの唇はブラック・ルシアンのほろ苦い香りがした。

3.　明け方の月

夜も明けようとする頃、珍しくイツキよりも先に目を覚ました。
シーツに投げ出されたイツキの手を取り、銀色に輝く爪の先をちょっとだけ口に含む。

「また……どんだけ気に入ってんの」

目を覚ましたイツキがあきれたように、かすれ声でつぶやく。
昔ケガをして、右手の薬指の爪が少しだけ歪(ゆが)んでしまったらしい。
「手を見られる商売だから」と、その指だけ銀色の付け爪をしているのだ。
本当の爪はあたしも見たことない。

銀色に光る綺麗なニセモノの爪は、イツキの白い指先にとても映えた。それはまるで、白む空に薄っすら浮かぶ銀色の月を思い起こさせる。

あたしは気だるい身を起こし、カーテンへ手を伸ばす。肩に触れる息に、あたしは首をうなだれた。

「……まだ月が出てるな」
「うん」

そのまましばらく動かなかった。やがてイツキが耳元でささやくように話しだす。

「月はチーズで出来ている、って聞いた事ある？」
「……チーズ？」

「そ。チーズ・ムーンって外国じゃ言うらしい」
あたしは首を持ち上げ、空に浮かぶ銀色の影を探した。
「でも黄色くないよ」
「チーズがすべて黄色いって限らないだろ」
クスクスと笑いながら、イツキの両腕が後ろからふわりと回された。背に押し付けられた重みにあたしは眉を寄せる。
抱きしめてる、というよりは寄りかかってるみたい。
「じゃあチーズケーキかな。レア・チーズ」
「園子は甘いもの好きだからな」
いい加減、笑うのやめて欲しい。肩にかかる息がくすぐったいから。
「美味しいって評判のチーズケーキあったっけ。場所分かったら教えるよ」
「うん、今度メールして」
「なに言ってるの。俺が連れて行くよ」
「でも、イツキいつも夜遅いし……」
「なんで夜じゃなきゃいけないの？」
あたしは肩越しに振り返った。イツキの少し乱れた髪の束が、カラーコンタクトを外した茶色の瞳を少しだけ隠してる。
うるんだ優しげな眼差しがのぞき、あたしは少しおびえてしまう。
◇　◇　◇

日曜日、人がごった返す老舗（しにせ）デパートの前。あたしは約束の３０分前に、待ち合わせ場所に到着した。

もうすっかり寒くなって、コートを着ている人もたくさんいる。皆一様に首をすくめ、時折白い息を吐きながら街中を闊歩（かっぽ）する。

少しでも温かい方へ向かおうとしてるみたい。

寒かったら中に入って待ってろ、と言われたけど、あたしは入り口の前にある外の柱に寄りかかって待つ事にした。

ここからなら通り過ぎる皆の姿がよく見える。

急（せ）くように小走りで通り過ぎる人たち。カップルも多く、お喋りしながら楽しげな様子もあれば、言葉は交わさないけどしっかりと手を握り合って寄り添いながら風を切る姿もある。

元彼は時間に厳しい人だった。

１０分ほど待ち合わせに遅れた時、外なのにこっぴどく叱られたおぼえがある。それからは絶対に遅刻しないよう、前もって３０分前に家を出る習慣が身についた。

約束の時間が近づくにつれ、あたしはどんどん不安になってくる。付き合ってもう半年経つのに、イツキと外で待ち合わせるのはこれが初めてだ。

夜のイツキしか知らないあたしは、彼が日中はどんな姿をしているのかさえ知らない。人ごみで気づかなかったらどうしよう。

向こうもあたしに気づかないかもしれない。

なるたけ顔が見えやすいように、あたしはマフラーを外して手に持った。

待ち合わせ時間まであと5分、という時。携帯のメール着信音が鳴った。
フラップを開いてみるとイツキからだった。
『悪い、急用ができた。　待ち合わせに行けそうもない。　また連絡する』

また連絡するって、普段だって連絡してきたことないのに。あたしはクスリと笑うと、ようやく安堵(あんど)のため息をもらした。

あたしはマフラーを巻きなおすと冷たい柱に寄りかかる。空を見上げると、もうほとんど日は落ちていた。
チーズ・ムーンならぬ、チーズケーキ・ムーンが顔をのぞかせる。

手袋をしてない、かじかんだ両手をポケットの中で何度もにぎりしめる。ドキドキして嬉しさがこみ上げてくる。
来ないと分かったから安心だ。もう来ないんじゃないかって、こわくなる事もないもの。

白い息を何度も吐いて、あたしは安らかな気持ちに浸っていた。
もう少しこのまま、こんな気分を味わっていたい。
背中から伝わる柱の硬質な冷たさは、あたしの体温をすっかり奪い、やがて全身の感覚を麻痺させていく。
なんだか空気に溶けてしまいそうだ。

◇　◇　◇

どのくらい時間が経ったのだろう。辺りのネオンがきらびやかな輝きを増してきたその時。

「園子！」

びっくりして顔を上げると、入り口から伸びる交差点から走ってくる人影。初めて見るグレーのコート姿だけど、すぐにイツキだと分かった。

小さかったその姿がどんどん近づいてきて、やがてあたしの前で見下ろすような形で立ち止まる。セットしていない、少し乱れた髪だけが、あたしが普段知る彼を連想させた。

それ以外は初めて会う人かもしれない。

「メール読まなかった？」

「読んだけど……どうしてイツキがここに」

「なんか嫌な予感がしたんだ。まさか、ずっとここで待ってたのか！？」

真剣で怖いイツキの顔。あたし、そんなに悪いことしたのかな。

「違うよ……ただ立ってただけ。勝手に」

弁明するように言うあたしに、イツキは白いため息をついた。申し訳ない気持ちと、どうしようもなく嬉しい気持ちとごちゃまぜになる。

さっきまで麻痺したように無感覚だった透明な気持ちが、途端に色づいて涙とともにあふれ出る。

「どうして泣くんだよ……」

イツキの言葉は小さくかすれてて、喉からしぼり出したように苦しそうだった。

「すっごくラッキーだなぁって」

あたしはポツリと言った。

「来れないって聞いたから。なのに突然イツキが現れたでしょ？すっごく驚いてあたし……」

ぎゅっと抱きすくめられて言葉が続かなかった。コートに張り付いた冷たい空気が溶けていき、徐々にイツキの体温が伝わってくる。

「来ないって分かってて、どうしているんだよ……」

イツキの言葉は、まるで自身に問うような響きだった。やがてあたしを解放したイツキは、「早く帰れ」と言ってそのまま仕事へと立ち去った。

◇　◇　◇

その夜、深夜0時過ぎ。

いつもより少し早くイツキはあたしの部屋に現れた。

「テイクアウトしてきた」

四角い箱を差し出され、あたしはお風呂ですっかり温まった手を伸ばして受け取る。フタを開けると真っ白いホールのチーズケーキ。

「ありがと……」

「おっと、そのまま食べちゃ駄目」

早速取り出そうとしたあたしの手を、イツキは大げさな調子でさえぎる。銀色に光る指先が、真っ白いチーズの表面をすくいとった。

「ほら」

そのまま口の中に運ばれ、あたしは驚いて目を見開く。舌を撫でるようにして引かれた指が濡れて光り、あたしは恥ずかしくて目を伏せた。

「……普通に食べようよ」

あたしがジロッと睨むと、イツキは皮肉っぽく眉を上げてみせた。

「園子の好きなものはチーズケーキと俺のこの爪。それから寒い中、ひとりぼっちで待つこと？」

「いじめるみたいに言わないでよ」

「いじめたくもなるね」

ショックなぐらい強い力で手首をつかまれ、あっという間にソファに押し倒されてしまった。見下ろしてくるイツキの表情は絶対零度の冷ややかさ。

どうしよう、マジギレしてる。

「今夜は、この指だけでイかせてあげる」

イツキは悪魔のような微笑を浮かべながら、あたしの目の前に銀の薬指を突き出した。つかまれた手は、指先の血が止まりそうなくらいきつい。

迫力に押され気味のあたしは口も聞けずに、必死で首を振ることしかかなわない。

「ずるいよ園子。君は好き勝手に愛情を振りまくくせに。俺自身からは何も求めないなんて、そんなのフェアじゃない」
「イツキ、痛い」
「俺の中で求められてるのは、この爪だけか……はがして捨てちゃおうかな、こんなもの」
「え！？」
「……なんてね、冗談。これまで無くなったら、園子は俺なんか見向きもしなくなる？」

そう言ったイツキは悪戯っぽい微笑をのぞかせる。それを見たあたしはほっとして、笑顔で大きくかぶりを振った。

分かってないなぁ、あたしは銀の爪が好きなんじゃない。その下に隠された、歪（ゆが）んだ爪が愛しいのに。
月に覆い隠されても密やかに息づく、明け方にあるまじき夜の断片みたい。もう自分の出番はないって、すねてるようで。

その夜イツキは明け方近くまで寝かせてくれず、あたしはチーズケーキ・ムーンを見そこねた。

4. ビター・ナイト

最近イツキが深夜前に訪ねてくるようになった。

「仕事が無い日」だから。そんな夜はすぐに寝室へ行かない。

日付が変わる前、あたしに要求するのは一杯のコーヒーだけ。リビングのソファーにもたれ、優雅に足を組んだイツキがそれを口に運ぶ。

壁掛け時計に目を走らせると十時過ぎたところ。

「……今日はやけに時計を気にしてるね」

冷たい流し目に、あたしはバツの悪い気分になる。

「まだ寝室へ行かないの」

「何、抱いて欲しいの？」

あたしは一層落ち着きをなくしてしまう。

イツキの綺麗な口元が弧を描き、艶めいた微笑を向けられる。手にはまだ、湯気の立ち上るコーヒーカップ。

「コレ飲み終わるまで待てないんだ？」

そうじゃなくて、と言おうとしたところで、突然身を乗り出してきたイツキに口をふさがれた。苦いコーヒーの味が口中に広がる。

ゆっくり絡められた舌先から、熱い液体が喉越しに流し込まれた。

「熱っ……喉、焼けそ……う」

舌の上でやけどしそうなくらい熱くて苦いキス。唇の端から零れ落ちた雫が喉をつたって、あたしのシャツにじわりと染み込んでいく。

何度もなぶられ、いたぶられた舌がしびれて痛い。長い指があたしの胸を乱暴に押し、そのままソファーとテーブルの隙間に二人崩れ落ちた。

一瞬離れた唇から赤い舌がのぞく。ぐっとつかまれた髪に顔を寄せられ、低い声でささやかれた。

「そんなに俺に、早く帰って欲しいの？」

あたしは脱力して瞳を閉じた。

「だって、お誕生日でしょ？」

「ふうん、知ってたんだ」

今日はイツキの誕生日。だからきっと、待っている人が大勢いる。あたし一人が独占してたら不公平だと思う。

「特別な日だよ……あたしはもう十分満足だから」

「満足？」

「今夜、会えただけで嬉しかった」

そう言って、急に自分の言葉に恥ずかしくなる。顔が燃えるように熱い。

「……分かった。じゃあ来いよ」

強引に立たされ、そのまま寝室へ連れ込まれた。ベッドに仰向けに押し倒され、あたしは困惑しながらイツキを見上げる。

「そんなに気になるんなら、さっさと済ませてやるよ」

性急に触れられ、あたしは全身でイツキの怒りを感じていた。あたしは泣きそうな気分でそれを受け止める。

冷えていく心とは裏腹に熱くなる芯は、しかし寸前で残酷にも放り出されてしまった。

「イツ……キ……？」

「……」

乱れた服を整えながらイツキは背を向けた。黒いシャツが涙で曇る。

立ち上がりかけたその姿に、あたしは思わず口を開いていた。

「ま、待って……」

振り返って見下ろしてくるイツキの表情は冷ややかで。蔑(さげすむ)むようなその視線に、あたしは思わずイツキのシャツをつかんでしまった。

「あ、あの……あたし……まだ」

どうしても次の言葉が続かず、あたしは唇を震わせた。

「俺、時間無いんだろ？」

「イ、ツキ……」

「言いたいことがあるなら早く言えよ」

銀の指先があたしの下唇をサッとなぞる。あたしは堪えきれずに涙をぼろぼろと流してしまった。

「お願い……お願い、だから……」

「……」

「イツキ、ねえ……イツキ……」

伸ばされた腕があたしの火照る体を抱き寄せる。そのまま手のひらで背中をなぞられ、あたしの体は自然に跳ねた。

「俺にどうして欲しい……？」

やさしい口付けが喉元に触れ、しかし次の瞬間ギュッと噛みつかれた。

「痛っ……」

「イヤ？　なら止めようか」

悪魔のようにあたしを翻弄（ほんろう）する声。とろけそうに甘い響きなのに残酷。

「十分満足なんじゃなかったの？」

「う、うう……」

「強情だな、園子は……俺もう帰っていい？」

「や、待って……待って……」

「ちゃんと言えよ」

心の奥底からほとばしる欲求。それを口に出すのが怖いのに……イツキは容赦しない。

「お、お願い……行かないで」
「……」
「ゴメン、ゴメンなさい……ゴメン……」
「俺は……」

イツキはそこで言葉を切ると、涙でぐちゃぐちゃになったあたしの顔をじっと見下ろした。

「俺は……そんな言葉聞きたかったわけじゃない」
「……ゴメ……」
「あやまるなよ。あやまって欲しいんじゃない」
「イツキ……」

イツキは一瞬切なそうな表情を浮かべ、次の瞬間それを隠すようにあたしの首筋に顔を埋めた。

「……俺の名前だけ、呼んでろよ」
「イツキ」
「そう、それでいい……」

やさしい抱擁(ほうよう)。

「それでいい……」

狂おしい口付けの合間、呪文のように繰り返される言葉。

◇　◇　◇

目が覚めると日はすっかり高くなっていた。背に感じる温かいぬ

くもり。

「イツキ……？」

まだ、帰ってないんだ……

そっと首を回して見上げると、安らかな寝顔。少し開いた口元がどうしようもなくセクシーで、あたしは再び体が熱くなるのを止められない。

――欲張りだ、あたし。

少し自己嫌悪に陥(おちい)りながらも、小さな声でつぶやいた。

「お誕生日おめでとう」って。

「……アリガト」

まさか返事があるとは思わなかった。

あたしが再び振り返ると、薄目を開けたイツキが穏やかな微笑をたたえていた。

昨日の熱烈さから一転して、その毒気が抜けた邪気のない顔にあたしは『本当に同一人物！？』と面食らう。

「今、何時？」

「もうすぐ6時……ね、まだ帰らなくていいの？」

「ん……まだ平気」

あたしは急に激しくなる心臓の鼓動に、ますます面食らう。

どうしよう、なんかすごく嬉しい。

「ねえ園子」
「……なあに」
「今日、会社休んじゃえば？」

その言葉にあたしは顔を上げた。そこにはあたしの一番弱い、艶めいた甘えるような表情。

「分かった……休む」
「え、いいの？　ホント？」
「うん……」

あたしはぎゅっとイツキにしがみつく。するとその倍の力で抱きしめ返してくるイツキ。

イツキ、あたし……あなたが好き。

「素直だね」
「変かな」
「ううん、素直な園子もカワイイ」

赤い顔を見られたくなくて、あたしはいっそうイツキの胸に顔を押し付けた。それをくすぐったそうに、イツキが体を小さくゆらす。

「プレゼント欲しいな……園子、キスして」
「え、ここ？」
「うん、キツク。痕つくぐらい……うん、そう……痛っ……」
「あ、ゴメン」

喉元についた赤い痕。あれ、これってもしかして……

「ふふ、おそろいだね」
「……馬鹿」
あたしは伸び上がって、初めてイツキの唇に自分からキスをしてみた。昨夜の苦さが、まるで嘘のように甘い舌だった。

5.　やさしい痛み

繁華街を少しそれた裏道にある洋風居酒屋。ここは、高校時代の友人である篤美(あつみ)と会う時によく使われる場所だった。

そして金曜日である今夜、三ヶ月振りに篤美と向き合ってテーブルについている。

「あんた、もうちょっと食べなくちゃ駄目よ。今時、ただ細いだけなんて流行らないんだから」

そう言って、篤美はあたしに次々と料理を取り分ける。姉御肌だから、昔から人の世話をせずにはいられない性分なのだ。

「そういえば最近、真由に会った？」

「つい先週会ったわよ」

もう一人の友人だった真由(まゆ)も、あたし同様、篤美には散々世話になった口だ。

「そうなんだ。あの子どうしてる？」

あたしの質問に、篤美は少し細めの眉を皮肉っぽく持ち上げた。

「どうもこうも、いつも通りよ。また彼氏とケンカしたって」

「また？」

「そ、『また』。電話口でわあわあ泣いて、その後うちのマンション来て一晩中飲んで帰っていったわ」

篤美のそっけない口調には、それでもどこか優しさを感じられる。

真由が彼氏とケンカするのはいつものことだが、それでも泣きつかれたら突き放すことなく話しに付き合ってくれる。あたしが前の彼氏と別れた時もそうだった。

「真由にとっちゃ、ケンカも一種のコミュニケーションなんだろうね」

「愚痴を付き合わされる身にとっちゃたまんないけどね。なんだかんだで、大学の時から続いてるから五年？男もよく付き合ってられるもんだわ」

「でも真由はカワイイじゃない。明るくって気が利くし」

あたしはフォローするように言ったが、篤美は興味無さそうに手元のグラスを傾けた。

「人のことはさておき、そういうあんたはどうなのよ」

「え」

「最近、恋愛の方はどうなってるの」

あたしはイツキのことを篤美にも真由にも話していない。いつもは「誰もいないよ」とあっさり流すところだが……

「うん、まあ…好きな人はいるけど」

「へえ、好きな人できたんだ？」

「でも、片思いだから」

あたしはへらりと笑って口へ運びかけた箸を下ろした。

「すっごくモテるんだ、その人」

「ふーん。でも進歩じゃない。失恋引きずって何もしないより格段マシだわ。それがたとえ、叶わぬ恋だとしてもね」

キュッと唇の端を持ち上げた篤美は、キツメの美人顔に似合う笑みを浮かべた。老舗デパートの化粧品売り場担当なだけあってかなり濃い目のメイクをしてるが、どこか親しみを覚える雰囲気は損なわれていない。

「そういう篤美はどうなのよ。彼氏とうまくいってる？」

篤美は職場恋愛している。あたしも一度会ったことがあるが、相手の男性はとてもハンサムで大人びた人だ。

「……うーん、ちょっと微妙」

篤美はあたしの顔を見ないまま、グラスを口に運んだ。

「彼、浮気してるみたいなの」

篤美の言葉に、あたしは冷水をかぶったような気持ちになった。

◇　◇　◇

その夜あたしはベッドから抜け出すと、明かりを落としたリビングのソファーの片隅に腰を降ろした。頭の中を行き交う色々な考えがまとまらず、うつむいたまま両手で顔をおおう。

「……園子」

名前を呼ばれても、あたしは顔を上げなかった。ソファーがかすかに沈む様子から、イツキが隣に座ったことが分かった。

「園子、どうした」
「……」
あたしが何も言わないことに焦れたのか、片方の手首をつかまれ無理矢理顔から引き剥がされてしまう。
「何考えてる？」
「……別に。ただ、眠れないだけ」
「嘘つけ」
乱暴に唇を合わされ、むっとしたあたしは顔を振り切って拒んだ。綺麗に弧を描くイツキの眉が、どこかからかいを含むように持ち上がる。
一瞬とはいえ、気の強い篤美の顔に浮かんだ悲痛な色に気づいてしまった。それなのにあたしは、篤美のような女性を後目に夜毎イツキと身体を合わせ続ける。
浮気な恋は、なんて残酷なのだろう。
イツキにつかまれた腕を振りほどけないあたし。この綺麗なイキモノに、あたしは魂まで喰らい尽くされてしまったらしい。
「……こわいよ」
自分の気持ちをセーブできなくなっていきそうで。たとえば『ずっと抱いていて』とイツキにせがんでしまいそうで。
イツキは黙ったまま、あたしがすすり泣く様をしばらく眺めていた。しかし、ふいに両手で頬をはさまれ、正面から見据えられた。

イツキの茶色い瞳が、暗がりの部屋で黒く沈んでみえる。口元が小さな微笑を浮かべると、突然噛み付くようなキスをされた。

「うっ……ふうっ……」

性急に口内を犯され、あっという間に息が上がる。そのままソファーに押し付けられたと思ったら、無理矢理身体を開かれた。

衝撃と痛みに、あたしは声にならない叫びを上げた。

先刻まで感じてた恐怖の震えが、シンプルな生理的苦痛に侵食される。その残骸が涙となって次々と流れ落ちた。

「……こわくない、こわくないから……」

半分麻痺している頭の芯(しん)に、イツキのささやく声が聞こえる。

「大丈夫、俺は君を愛していない」

「……う……」

「だから誰も傷つかない……もちろん君自身も」

固く閉じた目を緩慢(かんまん)な動作で開くと、イツキの湿った唇があたしの下唇を柔らかく包む。チュク・・・と味わうようにしゃぶられ、あたしの心臓がドクリと大きく脈を打った。

「安心できないのなら、もっと痛くしてあげる……こんな酷い事、本当に好きならできるはずないって感じられるだろ？」

「……うん……」

あたしはイツキの首に両腕を巻きつけ、「もっと」とねだった。えぐられるような痛みは、いつしか奇妙な快感にすりかえられてい

くのだろうか。
酷い人間だ、あたし……イツキも。
――そんなにやさしく、痛くしないで。
朦朧(もうろう)としてくる意識の中、気がつくと身体を離されていた。
抱きかかえられるようにして寝室へ運ばれると、イツキは壊れ物を扱うような手つきであたしをベッドに降ろす。
温かい両腕が伸びて、毛布ごと腰を抱き込まれる。胸に押し付けられるイツキの頭を、あたしは霞む目で見つめていた。
「……これで満足した？」
「……イツキ……」
「もう眠った方がいい。明日も会社だろ？俺はいつものように、夜が明けたら帰るから」
乱れた髪からのぞく、子供のように澄んだヘーゼルの瞳。
思わず手を伸ばしたあたしは、あやすように柔らかな髪をなでつけた。イツキは小さな微笑を浮かべると、ゆっくりと伸び上がって、今度はあたしの頭を抱きこんでしまった。
「おやすみ、園子……」
あたしは安堵のため息をもらして、眠りに落ちる。

6. Last Christmas

去年のクリスマス、あたしはすでに一人だった。

身を切るような外の空気を、たいして温かみも感じられないコート姿で街を歩いてた。きらびやかな電飾に包まれた店が立ち並ぶ光景に、やたら白けた気持ちになった覚えがある。

こんな日だって、つまらない気分の人々は世の中にたくさんいるはずなのに。

『誰もが楽しいクリスマス』だなんて、偽善的な香りがする商業キャッチコピーがそこかしこに溢れてる。

あたしは今年のイブも、去年と同じコート姿で街を歩いていた。平日だから仕事もあるし、クリスマスだからって仕事が減るわけでもない。

誰もが嫌がるこの日の残業を、あたしはいつも通り黙々とこなし、そして２１時を回ったところでようやく退社できた。

そんな帰り道。

売れ残りそうなケーキが積み上げられた、某有名チェーン店の軒下に出されたワゴンの前で足を止めたのは、あたしのちょっとした気まぐれ。

「いかがですかー？　今なら２０％引きになっておりますー」

売れ残ったら、捨てられてしまうんだろうな。

「二つ、ください」

「ありがとうございますー」

大きな包みを渡され、あたしは少し馬鹿馬鹿しい気持ちになる。こうやって買うから、こんなにケーキが作られる。まるで悪循環だ。

◇　◇　◇

自宅に着くと、合鍵で中に入っていたイツキが出迎えてくれた。あたしの手荷物を受取り、意外そうな表情を浮かべる。

「ケーキ食べたかったの？　だったら俺が、もっといいヤツ買ってきてやるんだった」

「いいの、このケーキで」

あたしは着替えもせずにキッチンに入ると、さっさと二人分のお皿とフォークを取り出す。

その様子を見て、ますます意外そうに眉を寄せるイツキに対し「ケーキ、箱から出してくれる？」と頼んだ。

「もしかして、俺も食べるの？」

「だって、あたし一人じゃ食べ切れないじゃない」

「俺甘いもの苦手だって、前言ってなかった？」

「言ってたかもね……どっちからいく？　イチゴ？　それともチョコ？」

あたしは二つのケーキを前に、テーブルの斜め向いに座るイツキの顔をのぞきこんだ。

イツキは気だるそうに前髪をかきあげると「直接食べた方が面倒じゃなくていいんじゃない？」とつぶやいた。

「ちゃんと切って、ちゃんと食べてあげようよ」
「切り分けられると、皿にのせられた分は全部食べなくちゃならない気がするからヤダ」
「残せばいいじゃない」
「残すって分かっているなら、はじめから手を出さない方がいいだろ？」

あたしはフォークを握りしめたまま口をとがらす。

「捨てるぐらいなら、はじめっから手を出すなってこと？」
「なんだよ、それ」

自然に手が伸びて、あたしのフォークがチョコレートクリームに包まれたブッシュ・ド・ノエルを突き刺した。すくいあげたスポンジは外のクリームよりもチョコ色が濃くて、口の中一杯にほろ苦いココアの味が広がった。

「園子、泣いてる」
「……」
「何が気に入らないんだよ？　俺、なんかした？」
「……」
「分かったよ、食えばいいんだろ、ケーキ」

あたしがぐずぐずと鼻をすする中、イツキは黙ってケーキを口に運んだ。みるみるうちに、チョコ風味の切り株が小さくなっていく。

「ふうん、結構甘さ控えめなのな」
「……」
「このサンタ、園子にやるよ……ホラ」

頭のてっぺんをつままれたサンタが、あたしの目の前に差し出された。端に少しクリームをつけたイツキの口元はへの字になったまま。

それでも、あたしを見つめる目は優しい気がした。

「ほら、口開けろって」

「あー……」

あたしは甘いサンタチョコを租借(そしゃく)しながら、ふと疑問が頭に浮かんだ。

「今日、クリスマスイブだよね？」

「うん？」

「なんでイツキ、ここにいるの？」

「なんでって……」

イツキはフッと苦笑を洩らすと、頬杖をついてあたしの顔をのぞきこんだ。

「残りモノ、だから？」

「イツキが？」

「園子に食べてもらわないと、捨てられちゃうんだよ……きっと」

あたしの口に、チョコより早く蕩ける舌。馬鹿みたいに甘いその演出は、きっと白々しくも楽しいクリスマスだから。

頭の中では、去年のクリスマスに告白したけど振られた、という巷でも有名なクリスマスソングが流れ始める。

確か歌の中では、キスされたらまた好きになっちゃう、って言ってたっけ。泣きたくないから、あきらめたいのだ、とも。

「ん……泣きやんだ？」

からかうような声音と共に唇がそっと離され、あたしは顔を赤らめる。泣きたくないから、なんて理由じゃ嫌いになれない。

「イツキ、大好き」

「何それ」

クスクス笑うイツキの両手が、あたしの頬をそっと包み込む。

もう何度振られてもいいや、って思う。明日振られても、いいや。

「大好き」

「何だよ、それ……」

イツキはちっとも真面目に取り合ってくれず、相変わらずクスクス笑いながらあたしにキスを落とした。

Ｍｅｒｒｙ　Ｃｈｒｉｓｔｍａｓ．

7. 連絡

年が明け、寒さも一層厳しくなってきた。
週末土曜の昼下がり、あたしは街のとある雑貨屋さんにいた。

「園子ちゃん？　あ、やっぱりそうだ」

肩を軽く触れられて振り向くと、そこには仕立ての良さそうな黒いコート姿の、背の高い男の人が立っていた。軽く後ろに流した黒髪に、静かで端正な顔立ちは、確かに見覚えがあった。

「……もしかして、シキさん？」

シキさんは、イツキと同じ店で働くバーテンの一人だ。バーテン歴はイツキより長いらしく、落ち着いた物腰は三十半ばぐらいに見える。

「今日はひとりで買い物？」
「コップをいっぺんにふたつも割っちゃって、だから少し買い足さなきゃいけないんです」

シキさんの視線に、あたしはあわてて右手の指先をポケットにかくした。割れたコップを片づける時、触れた指先をさっくりと切ってしまったのだ。かなり血が出たので病院へ行ったら、なんとも大げさなくらい派手に包帯を巻かれてしまった。
それほど傷は深くないのに。

「ところでアイツ、イツキは元気？　最近シフトずれてて、あまり会ってなくてね」

「……ええ、元気だと思います」
「思います、ってどういうこと？」
「ここしばらく、会ってないんです」

目の前の棚に置かれた、淡い水色をしたグラスのコップを手に取る。視線を落とすと、薄い笑みを浮かべたあたしの顔がくにゃりと映っているのが見えた。

「なに、喧嘩でもしたの？」

驚いた風でもなく、やさしく問うシキさんに、あたしは視線を落したまま小さく首を振った。

「じゃあ、なんで」
「さあ……向こうが来ないんです。特に約束しているわけでもないから、きっと会う気がしないのかな」
「連絡してみた？」
「あたしからは、あまり連絡したことないんです」

それは嘘だ。
あまり、どころか、あたしからイツキに連絡したことなんて一度もない。

いつも受身のズルイあたし。
拒絶されるのが嫌だから。

昔、元彼が忙しくてなかなか会えなかった時、一度あたしはその元彼のアパートへ訪ねたことがあった。
連絡しないで突然行って、ちょっと驚かせてみようと思った。卒論で煮詰まっているのは十分承知だったので、玄関先で差し入れの

お弁当を渡したらすぐに帰ろうと思ってた。

三回目のチャイムで玄関の扉を開けたのは、見知らぬ女の子だった。そう、それはあまりにも『よくあるパターン』というやつで、陳腐なほど分かりやすい状況だった。女の子は、あたしのパジャマを着ていた。

最初に連絡すればよかった、そうしていたら鉢合わせることもなかったのに。でも、それだと事実を知るのはもっと先になった。

『知らない方が良かったのか』と、知ってしまった後のあたしはしばらく悩んだ。

後悔もした。

何も、なぐさめにもならなかった。

これでよかったんだ、と頭で納得しても、感情は聞き分けのない子供のように地団太を踏んでいた。

今ならこう思う……連絡のない時は、決して近づいてないけない。きっと連絡したくない理由があるのだ。

それは人の気持ちだから、どうしようもない。

自分の気持ちだって持て余してしまうのだ。他人の気持ちなんて、どうして口出しできるというのか。

◇　◇　◇

その夜———実に三週間ぶりに、イツキが訪ねてきた。

玄関のたたきの上で突っ立っていたあたしの前で、ふわりと微笑を浮かべたイツキが目を細めた。

「何、その珍獣を見るような眼は」
「あ……別に」
「ご挨拶だね。久々に会った恋人の顔、忘れちゃった？」
「……え……」

いつの間にか顎にかけられた、懐かしい長い指。マフラーを首から抜きながら、少し不服そうな顔。

「もう少し、嬉しそうな顔見せろよ」
「……うん」
「いや、やっぱりすねた顔の方がいいかな。それに可愛げ無いセリフの方が、園子に似合う」

親指の腹で、そっと下唇をなでられる。そのセクシャルな仕草に、ゾクリと体中に戦慄が走った。
少し伏せた艶めいた視線が、絡みつくようにあたしの唇を見下ろす。

「別に、さみしくなんかなかったって、この口で言われたら……たまらないだろうな」
「何、言って……」
「そんな泣きそうな顔して、俺を煽っているの？」

触れるだけのキス。

「会いたかった、園子……もうこれ以上、我慢できない」

吐息交じりの声に、どうしようもなく優しい抱擁。まるで小さな女の子になった気持にさせられる、そんな抱きしめ方だった。

気がついたら、あたしの両腕はイツキの背に回り、グレーのコートの表面をしっかりと握りしめていた。なんだか震えが止まらない……寒いわけじゃ、ないのに。

パジャマ越しに感じる温かい手が、あたしの背中を撫で続ける。ぬくもりが心を包み込むほど、あたしの身体は緊張で小刻みに震えた。

この夜のイツキは、かつてないほど優しく執拗にあたしを抱いた。その後、腕の中に閉じ込められたまま眠りについた。

8.　乾いた欲望（前書き）

※イツキ視点

8．　乾いた欲望

誰でもいいわけじゃなかった。
そう、できれば手に入りやすくて捨てやすい……そんな相手だ。
冷めて、なげやりな口調。流されていく気持ちに、あきらめた表情で自分を見ている。自分自身を傷つけるほどに自己愛が強くて、無様な可愛い女。
そんな女がいい。
「樹（いつき）、お前もうあの子に手を出したのか」
カウンターから作ったばかりのブラック・ルシアンを差し出しながら、先輩バーテンの志岐（しき）が問う。俺が口の端を上げると、「仕方ないやつだな」と志岐はあきれた顔をした。
「あの子どうみても素人じゃないか。こういう遊びに慣れてないんだろ？」
「見かけほど、そうでもないさ」
「へえ」
俺は肩越しに振り返って、奥の席で小さくうつむく園子の姿をとらえた。どこか不器用で純朴な雰囲気を持つ、でもとびきり冷めた瞳の女。
出会ったその夜に抱かれるくせに、なぜかすれてない印象を持った。しくじったかと思ったが、身体を離したとたん顔をそむけて俺に見向きもしない。
約束も欲しがらない。

連絡も欲しがらない。

別れ際「またね」もなければ「さよなら」もない。まるで通りすがりの他人のような、よそよそしさ。

さっきまで抱き合っていたのに、初対面の人間に向けるような眼差し。

そんなアンバランスな彼女は、突き放すような愛情を俺に注いでくる。しかも酷く自分勝手な、投げ捨てるようなやり方でだ。

◇　◇　◇

「作風変わりましたね、本宮（もとみや）さん」

駅前のファミレスの店内で、テーブル越しに言われたその言葉に俺は顔を上げた。

相手が読み終えたばかりの原稿が、二つのコーヒーカップの間にきちんと揃えて置かれていた。

「だめですか、そのプロットじゃ」

「いえ、そんな意味では……どちらかと言うと、切ない純愛ですねこれは」

俺は黒ぶちの眼鏡の真ん中を押し上げると、ジーンズの足を組み直してボックス席のソファーに寄りかかった。目の前に座る男は再び原稿を手にすると、それをめくりながら日焼けした顔をてらてらさせて何度も苦笑をもらす。

「いやあ、いいなぁ。意外と言うか、良い意味で変わりましたよホント」

「そうですか」
「ええ、ただ官能小説にするのは勿体ない。どうでしょう、普通の恋愛モノとして出してみては？」
横に転がしておいたジャケットのポケットからブラック・ルシアンの箱を取り出し、一本口にくわえる。ひと息紫煙を吐き出すと、俺は肩をすくめてみせた。
「純愛、ですか」
「え」
「その恋愛話ですよ。浮気な恋を描いたつもりですけどね」
コーヒーカップに視線を落とし、組んだ腕を解いて髪をかき上げた。少し驚いている自分がいる。
「いずれにせよ、いい作品になりますよこれは」
「戸倉さんがそうおっしゃるなら、俺は別に構いませんよ……恋愛モノとして出しても」
「じゃあ決まりですね。さっそく上に話しておきます。担当は変わることになると思いますが構いませんか？」
「ええ。あ、ひとつだけ……」
俺はニヤリと口元をゆるめた。
「女の担当だけは勘弁して下さい。面倒なので」
戸倉は心得た、とばかりに深くうなずいた。
◇　◇　◇

担当の戸倉に言われた言葉が、ずっと心で消化不良を起こしている。

官能小説を書いて五年経つが、まともな恋愛話なんて自分に書けると思ったことなかった。特に今回は、今まで以上に乾いた男女のやり取りを描いたつもりだったのに。

今まで生々しい女の欲望に触れ、それをできる限りきれいに切り取って文章に映していた。優しく揺さぶると甘い毒を吐き出す女の身体は、俺の小説の格好の材料だった。

でも園子だけは違った。

俺に何も求めないし、欲しがらない。いくら抱いても甘い息しか漏らさず、その口から毒の一滴もこぼそうとはしない。

――とんだ期待外れだ。

俺の彼女への執着は、つまらない意地からきているのだ。

彼女の心の奥に秘められた、猛毒が湧きあがる泉を掘りあてようとやっきになっているだけだ。

そんな考えをめぐらせていると、思考の外側から小さなささやき声が聞こえた。

「まだ寝室へ行かないの」

コーヒーの湯気越しに、ぼんやりと立つ園子の姿が映った。俺は内心いらつきを感じつつ、薄く笑ってみせた。

「何、抱いて欲しいの？」

途端に落ち着きなく視線を泳がせる園子は、恥じらいより面食らったような様子だ。
合意の上なはずなのに、まるで義務をこなすように抱かれる彼女に、俺は一層いらつきを覚える。
――俺に抱かれたくて、抱かれるんじゃないのかよ。
俺の中で凶暴な感情が生まれる。酷くして泣かせて、その乾いた瞳を欲望で満たしてやりたい衝動に駆られる。
「そんなに気になるんなら、さっさと済ませてやるよ」
ベッドの中で狂おしいほど焦らして、もだえるその姿を目に焼き付ける。サディスティックな満足感すら覚える。
全身から伝わる園子の震えに、俺の心も奇妙な感動で震えた。
――もっと、欲しがってみせろ。
こいつの欲しいものが分からない。彼女の心は、俺の知らない何かで一杯になっている。
俺のほんの小さな一部だって、立ち入る隙間がないほどに。
「イツキ……」
小さな声が、俺の身体にしみこむ。
彼女は俺の呼び名しか、知ろうとしない。
「俺の名前だけ、呼んでろよ」
「イツキ」
「そう、それでいい……」

それだけでも、いい。
求められることが、こんなにもたまらない気持にさせるなんて。
求められないことが、こんなにも狂おしい気持にさせるなんて。
園子に出会うまで、知らなかった。

9．　侵食（前書き）

※イツキ視点

9. 侵食

兄貴の三回忌で久しぶりに訪れた実家は、俺の記憶のそれと変わらなかった。

白々しいほど暖かく、よそよそしいほど他人行儀だ。

「樹さん、今日は泊まっていかれるのでしょう？」

夕食の席で兄嫁が見せた笑顔はどこまでも無邪気だった。喪服の上に乗っかった首は細く頼りなく、折ってしまいそうだ。

「終電で帰ろうと思っています」

「でも、もう駅までのバスはありませんよ」

「タクシーを呼べばいいでしょう」

薄ら笑いを浮かべたままの口で黙ってしまった兄嫁の隣では、せかせかと箸を動かす母親が「遅いから今夜は泊まっていきなさい」とぶっきらぼうに言った。

親父はすでに夕食を済ませて床に着いていた。集まった親戚と大量に酒を飲み、酔いに任せて眠ったに違いない。

兄貴は、親父の自慢だったから。

有名大学卒の兄貴は役所勤めだった。

高給取りというほどではないがそこそこ良い収入を得て、年金暮らしの両親と実家で暮らしていた。そして大学時代から付き合っていた女と結婚した。

毎晩帰りが遅い亭主に対して愚痴のひとつもこぼさなかった兄嫁

は、両親にも気に入られかわいがられていた。
当時はまだ頻繁に実家に顔を出していた俺に対してもすこぶる愛想が良かった。

その頃俺は中小企業に勤め始めたばかりのサラリーマンで、会社の新人に対する不当な扱いについていつも腹を立てていた。
そんな俺の愚痴につきあってくれたのが兄嫁だった。

ある日とある事情でどうしても会社を辞めざる得なくなった俺は、社宅を出た後しばらく実家にこもっていた事があった。親父が交通事故にあったのもその頃だ。

足を複雑骨折した親父はしばらく入院を余儀なくされ、母親は病院へ赴き付きっきりで看病していた。朝早くに病院へ出かけ、夜遅くにならないと帰宅しない日々が続いた。

――だから、そんな『隙』が出来たのだろう。

好意を寄せ始めていた女からの誘いに俺は拒めなかった。夜毎体を重ね、夜毎失望感を味わった……女に対しても、自分自身に対しても。

「なぐさめが必要なのは貴方だけじゃないの」

そう言って彼女は俺にすがった。好きな女の不貞を見せつけられ失望し、その不貞に手を貸した自分に失望した。
そしてそんな自分の妻と弟の仲に全く気付けない兄貴にも失望した。兄貴は人の心に愚鈍になるほど仕事人間だった。

機械的に体を合わす度に、お互いの体から染み出す錆のようなも

のに侵食されていく。心も体もボロボロに腐り果てそうだった。
彼女の体は甘くもなく、ただ汗で塩辛かった。
兄貴が死んだその夜、彼女は狂ったように俺を求めた。
彼女に体中の熱を吸い取られた。指先まで冷たくなった。
冷え切った気持ちで見上げた彼女は無邪気な笑顔で微笑んでいた。
『これで後ろめたくならないでしょう』……その顔が言っていた。
――これは浮気じゃない。樹さん、これは浮気じゃないのよ……。
「樹さん、泊まっていかれるでしょう」
彼女はあの時と同じ顔で笑っていた。もしかしたら俺の中に再び生まれた熱を嗅ぎ取ったのかもしれない。
園子と会って、園子と身体を重ね、そこで生まれた熱を吸いつくそうとしているのかもしれない。
こういう女はこういう勘だけ鋭い。
もし今夜彼女と体を重ねたら、また俺の体は冷えるのだろうか。
そして次に園子と会った時には、園子と初めて会った頃の俺に戻っているのだろうか。
そんな好奇心があった。
だから俺はうなずいたのだ。
◇　◇　◇
玄関の前で園子はきょとんとしていた。

「何、その珍獣を見るような眼は」
「あ……別に」
「ご挨拶だね。久々に会った恋人の顔、忘れちゃった？」
『恋人』……これほど薄っぺらい響きがあるだろうか。少なくとも俺と園子の間では通用しない。
恋人と呼ばなくてもいい。
そばにいられるなら何だって構わないんだ。
「会いたかった、園子……もうこれ以上、我慢できない」
離れていたのに苦しいほどの熱が体の奥底から湧きあがる。
いくらあの女を抱いても冷めることのなかった熱は、園子を目の前にして一層狂おしいほど、指先が溶けるほど、乾いた唇が燃えるほど、唇と唇が重なって……
「あ……」
熱が侵食し、二人一緒に溶けていく。

１０．　狂おしい恋

最近嫌な夢を見るようになった。
ここしばらく見なかった夢だ。

元彼に捨てられる夢。その夢の中で、私が苦しんでいる。
悲しいのではなく、恋しいのではなく、ただ苦しい。
自分の内側に生まれてきそうな、おぞましい感情。

消してしまいたい、彼も、あの子も、私自身も。皆いなくなってしまえばいい。
そうすればこんなに苦しまなくて済む。

でも、誰から先に？
誰が手に凶器を持って、誰が最後に自分を消せばいい？
そんなの決まってる。私しかいない。
これは私の願望なのだから。

でも本当はそんなこと望んじゃいない。
本当は三人とも同じぐらい幸せになりたいのに……そんな欲張りは通用しない。

でも目が覚めるとそんな世界があった。
イツキ、あなたがいた。

元彼とあの子、そして私……三人だけの世界にイツキが現れた。
これで三人幸せになれる。でもイツキは？

イツキは幸せになれる？

「園子、おいで」

抱き寄せられて、切れた唇を私のそれに近づけられた。ふいに顔をそむけたくなる。

殴られた痕だって、そんなの私にも分かる。聞けば正直に話してくれるだろう……でも聞きたくない。

聞きたくない、そんな自分の感情が苦しい。

苦しくなる理由は分かってる。

――私は嫉妬している。

自分の欲望が怖くなる。膨らみ続けていくばかりで。いつか心の中がぎゅうぎゅうになってしまう。正気を保てるのか自信がない。

私に触れる指先を……誰にも触れさせたくなくなる。

あの子も幸せになって欲しいのに。

だってあの子はかつての『私』。だからあの子がどんな気持ちなのか、私には理解できるのに。

◇　◇　◇

その日、残業を終えて帰路に着いたのは夜の九時を回った頃だった。

マンションの向いの通りに立つ人影に気づいた私は足を止める。

「……こんばんは」

声を掛けられても思い出せない顔。誰だろう、見たことがない女の人だ。

次の瞬間、きらりと光る何かが私の視界を捕らえた。
銀色の鋭い切っ先が緩慢な動作でゆっくりと私に向けられる。

――思い出した。

その顔はキャンディ・パルファムの子のもの。
甘い香りを思い出す……でもよく見ると彼女じゃなかった。

それは篤美の顔だった。
彼氏の浮気をさらりと口にした、あの赤い唇・・・きっとそう。

――違う。

何か言おうとしているような、少し開きかけた唇。少しすくめた、自信無さげな肩。
そして怯えたような、あの空っぽの瞳。

その顔は『私』だった。

ああ、ごめんね……そんなに泣かないで。ずっと苦しかったんだね。

なのに私はあなたを嫌って、あたかもいない風を装ってた。
あなたはひとり取り残されて、誰も訪ねてこない真っ暗な部屋にいた。

生きてるって、とても辛い。

だから人は、あたかも生きていないふりをする。

何も感じないように空っぽにした体を動かすだけ。そうして胸の中にあった気持ちは、初めから無かったことにする。

過去を消せない代わりに、自分の中をリセットしてしまう。

でもそんなこと、本当は望んではいなかった。

いつだってリアルに生きている感覚が欲しかった。

誰もが皆、心に凶器を抱えて生きている。それは相手を傷つけ、自分もを傷つける。

でも、私達はそれを手放せない……誰も傷つけたくなんか、ないのに。

気がついたら、私は手を伸ばしていた。

「――あ」

温かい痛みが体の中心に走る。

私は『私』の背に両腕を回して、さらに体を密着させる。

心臓の鼓動が聞こえてくる。

ドク、ドク、ドク……

痛みを感じないと、人は生きている実感が湧かないのかな。

傷ついて初めて気づくものなのかな。

辛くても苦しくても、いつだって愛したかった。

いつだって愛して、生きているんだって感じたかった。

ねえイツキ、あなたを愛している……痛いほど、愛してる。

11.　ひとこと

――こんな時でも　何も言わないんだ

あきれたように苦笑をこぼすあの人。

ちょっと口の端を持ち上げて、斜にかまえた視線の先は何を見ていたのか。

私の顔じゃないことは確かだった。

「――イツキ」

「起きた？」

読みかけの本を閉じたイツキは、ベッドに横たわる私の顔を覗き込む。

ふわりと下ろされた前髪が私の額をかすめる。

「どう、まだ痛む？」

「ううん」

私が目を覚ますたびに繰り返される会話。それからようやく、病院特有の消毒薬がつん、と鼻につくのだ。

だから涙が出そうになるのだ。

腹部に深い傷を負った私は入院を余儀なくされた。命に別条はなかった。

「俺を責めてもいいんだよ」と、イツキはいたわるようにささやいた。

自分の行動が今回の事件を引き起こしたのだから、とも。
私を刺した女の人は、イツキの恋人の一人だったらしいから。
それを聞いた私が顔をしかめると、イツキがうれしそうに笑った。

◇　◇　◇

夜になるとイツキは帰ってしまう。
個室のベッドにひとりでいると、なんだか奇妙な気持ちになる。
そんなタイミングで携帯の着信が鳴る。
イツキの「眠れそう？」という声が心に響く。うん、と答えると、決まって「うそつけ」と苦笑交じりに言われる。
元彼と別れる時、苦笑をもらした彼の表情を思い出す。
――こんな時でも　何も言わないんだ
言わないよ、言えないよ。そんな風にずっと思っていた。それなのに……
「うそ、やっぱり眠れそうにない」
「ほらね。誰かそばにいないとダメなんだ」
「そんなことないよ」
「うそつけ」
取りとめのない会話が、やっぱりつん、と鼻にくる。
「うそだよ……」

「やっぱり。園子はうそばかりついている」
「うん」
「本当は俺がいないと眠れないんだろう？」
「うん」
「俺がいないとさみしいんだろう？」
「うん」
「俺を愛しているんだろう？」
「……うん」

そこで小さな笑い声が響いた。

「そこだけ返事、遅いよ」
「うん」

心から言葉があふれでる。それはちっとも特別な言葉じゃなく、とても簡単なひとこと。

――うん。

それだけで、電話の向こうのイツキは笑ってくれる。とてもおかしそうに、そしてとてもやさしげに。

私のたった、ひとことで。

11.　ひとこと（後書き）

次回最終話です。

12．　最終話

戸口のすり減った石畳の上で、オレンジ色の光がふわふわとおだやかに揺れている。

「買い物に出てくるから」と後をたのまれた女は、店番ぐらいしか今のところ役に立ちそうにない自分をふり返って感謝した。小さな頃から慣れ親しんだ実家の古い雑貨屋は、久々の帰郷で気づいたことだが、なかなかどうして居心地は悪くない。

ケガを負った腹部はまだうずくが、それもほとんど気にならなくなった。

耳の奥ではひっきりなしに波の音が小さくこだましており、それは女にとって体内のリズムを刻む心音をきくように自然で、心が凪(な)いだ。手にした本の中身がどういうわけか、今の女の気分に不思議と調和していた。

そんな空間に、突然長い影が差した。

でもそれもやはり、いやな類のものではなかった。

「久しぶり」とお互い見つめ合いながら、ありきたりなあいさつを交わす。

女の目の前に立つ男は黒っぽいジャンパーのボタンを神経質そうな指先でもてあそびながら、すっきり整った面立ちにあいまいな微笑をのぞかせる。

「会ったら、最初なんて言おうかずっと考えていた」

ゆっくりと切り出され、女は手の中で開いたままだった本を閉じた。ひざの上にのせられた表紙に、男の視線が一瞬だけ向けられた。

「今朝届いたばかりなの」と、女は言い訳めいた口調で口ごもる。そして手の中の本を見下ろし、やや不満そうに……照れかくしもあるのだろうが……「私こんなに素直じゃないわ」と小さく付け足した。

「俺よりよっぽど、気がきいたセリフだね」

男はさもおかしそうに言う。

「俺の場合せいぜい『元気だった』とか『傷の具合はどう』とか、ありきたりな言葉しか浮かびそうにない」

「ところでどうしたの、こんなところにいるなんて」と女が顔を上げると、男はちょっと得意げに「この近くに引っ越してきたんだ」と説明した。

女のおどろいた顔に、男はますます満足げに目を細める。この薄暗がりの店内で、まぶしいものを目にしたか、もしくは何か珍しいものを発見したかのように。

女はちょっと考えるように視線をおよがせ、かなり自信なさげに「私がいるから？」と小声でたずねた。

男がうなずいたのは、視線をあげない女にもわかった。女はますます自信なさげに「でも私また引っ越すかも」と言うと、男はこともなげに「じゃあ俺も引っ越そうかな」と返す。

女が困った様子で視線をあげると、あきらかに状況を楽しんでい

るかのような男の視線にぶつかって、ちょっと口をとがらせた。

「ストーカーにでもなるつもり？」

「そっちが逃げるならね」

「逃げてるつもりなんか、ないわ」

「嘘ばっか。もう、あきらめてよ」

「何をあきらめればいいの」

「前にあったこと」

女は瞳を大きくした。

「俺より思い切りもあきらめも悪そうだから、ちょっと手伝ってあげようと思ったんだ。それだけ」

男の言葉に、女はまばたきをした。

「もう、あきらめたわ」

男が何か言おうと口を開らく前に、女は言葉を続けることにした。

「あきらめることにしたの……あきらめの悪い自分。嘘をいう自分。臆病な自分。逃げる自分。嫉妬する自分。それで自分がきらいになりそうな自分も。あなたの本を読んで……まだ途中だけど……そう思った。別にうしろ向きになるわけじゃないの。今までが自分のこういった部分を認めなさすぎたの。無視しすぎていたんだわ。こういうのって大事なことなのに」

今度は男が、女の言葉を咀嚼（そしゃく）するように数度うなずいた。

「じゃあこの本書いてよかった、ってことになるのかな。いや、ま

だ分からない。手に入れるまで安心できないな……君のほんの気まぐれかもしれないし、今は本気でも、また気が変わる可能性だってある」

男は手を伸ばすと女のひざから件(くだん)の本を取り上げ、背表紙でトンと自分の肩をたたいて笑ってみせた。

「でも……そんな浮ついた気持ちでも、愛情に変化しそうじゃない？　実際君も僕も、もうすでに恋してるようなものだし」

「そうなの？」

「そうだよ。終わるキッカケも始まるキッカケも、実にささいなことだね」

「……」

「気がつくと終わってるときもあれば、知らないうちに恋してるときもあるんだから」

「ずいぶん分かりにくいのね」

「君の気持ちほどじゃないよ」

「私の？」

「そう。でももういい、俺もあきらめたから。君の気持ちなんて分からなくても別にいいんだ……そばにいられるだけで十分」

男の最後の言葉が、波のように女の心に押し寄せる。

女の心の入口にあった防波堤はいとも簡単に決壊(けっかい)し、その後にすがすがしいほどの空間が生まれた。

まず女の目にとまったのは、本の背表紙に巻きついた、男の少しゆがんだ爪先だった。

以前に男が、ケガをして爪がゆがんでしまった、と話してくれたのを思い出す。それまでは付け爪でかくされてたので知らなかったが、もっとひどいのを想像していた。

「……想像してたより悪くなかったのね」
「え？」
「ううん、なんでもない」
女に浮かんだ安堵（あんど）の表情に、男はちょっと首をかしげ、それから本を持っていない方の手を女へと伸ばした。
「じゃあ、ちょっと歩きに出ない？　久しぶりに海辺にきたから、めずらしい気持ちになっているんだ」
「でも私、店番たのまれていて……」
女はそう言いかけて、ふと石畳の向こうに買い物から帰ってくる母親の姿を見つけた。
二人が手を取り合って店の外に出ると、道の向こうから満面の、だがどこか人の悪いからかうような笑みを向ける初老の女性が立っている。女の母親だろう。
男が軽く会釈をするのを、女は「いいから」とあわてて引っ張る。
ようやく並んで歩きはじめた二人の足元では、だんだん大きくなってくる潮騒に合わせるように、単調だが心地の良いステップを刻んでいた。
始まるキッカケは、そんな風だった。
（おわり）

１２．　最終話（後書き）

最後までおつきあいくださり、ありがとうございました！
（この作品は２００８／１１／０８～２００９／１２／２１に書いたものです。）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9309s/

浮気な恋

2011年7月28日12時57分発行